



Ed. E. Fukui

## The Climate of Japan

Developments in Atmospheric Science 8  
 ELSEVIER SCIENTIFIC PUBLISHING  
 COMPANY Amsterdam • Oxford • New York  
 KODANSHA LIMITED Tokyo, 1977,  
 24cm × 16cm, 317頁, 6500円

この本は、東京教育大学名誉教授福井英一郎博士の編集になる英文による日本の気候についての本格的な専門書であり、著者陣は次のような日本の代表的な気候学者によって構成されている。新井正（立正大学助教授）、浅井辰郎（お茶の水大学教授）、福井英一郎（東京教育大学名誉教授）、河村武（気象研究所応用気象研究部、第2研究室長）、水越允治（三重大学教授）、西沢利栄（立教大学教授）、高橋浩一郎（筑波大学教授）、吉野正敏（筑波大学教授）。

本書は次の章からなる（カッコ内は著者）。

1. 序論（福井）、2. 日本の季節（福井）、3. 日本の気候の動気候学的、総観気候学的観点（吉野）、4. 冬の季節風（吉野）、5. 初夏の雨季、梅雨（吉野）、6. 盛夏の小乾燥季、7. 台風と秋りん（高橋）、8. 熱収支（西沢）、9. 水収支（新井）、10. 気流の型と風系（河村）、11. 人間活動による気候の改変（河村）12. 気候区分と気候誌（水越）、13. 気候変動、過去と現在（福井）。

本書の第1章に、1897年からこれまでに日本で刊行された「日本の気候」と題する本があげられているが、それによると英文によるものは1931年に中央気象台から刊行された T. Okada による Climate of Japan については本書が初めてである。この2つの本をくらべてみると、昭和の初頭と今日とで、日本の気候についてのわれわれの理解や、それを解明する手法がどのように深化し

進展してきたかが、よくわかる。岡田の本では、日本の気候が、いわゆる「平均値気候学（古典気候学、静気候学）」の立場で取扱われ、主として各気候要素の平均値の分布が論じられている。岡田の本においては台風の記述が欠落している。この欠落の原因はわからないが、もしも、台風のもたらす天気、気候要素の平均値の分布にとって単なる「じょう乱」にすぎないという立場から出たものとすれば、それは正に手法そのものにもとづく欠落であった。もっとも岡田の本は、日本の気候表、気候図を外国向けに提示することに主目標があったようにも見える。一方、現在では日本の気候表も気候図も外国人が利用し得るものが出版されている。したがって本書では、むしろ日本の気候の形成過程や構造の解明に主力かそそがれており、日本の気候の特徴が気団、前線帯、ジェット気流、天気図型などの振舞いや、熱収支、水収支によって解明されている。そしてその取扱いは動気候学的であり、大気大循環その他の最近の気象学の成果が豊富に取り入れられている。また都市気候や中気候、気候区分についても、面目を一新した記述が行なわれている。本書は Developments in Atmospheric Science の第8巻にあたっており、このシリーズには、たとえば第1巻 F. Verniani Structure and Dynamics of the Upper Atmosphere、第2巻 E.E. Gossard and W.H. Hooke, Wave in the Atmosphere などがある。

英文による Okada(1931)から Fukui(1977)の間に、日本の気候に関する邦文による多くの労作があり、Fukuiの本は、それらの労作の延長線に位置しているわけであるが、この間の気候学の進歩に基本的な役割を果たした福井教授によって、この本が編集されたことは意義深い。また、上記の期間において日本の総観気候(象)学の発展に大きな寄与をした高橋浩一郎教授が、この本の著者として参加されていることも、日本の気候と日本の気候学の水準を世界に伝えるのに、大変よいことであった、と思われる。福井、高橋の両先生が、日本の気候・気象界の中樞の地位を長い期間勤められた後で、さらにこのような学術的労作に精進されている姿は、後進の心をふるい立たせるものがある。（倉嶋厚）